

巻 頭 言

地域経済研究所の事業概要と、これから

福井県立大学地域経済研究所長 南保 勝

日頃は、地域経済研究所の事業につき何かとお世話になり、誠にありがとうございます。また、研究所の事業運営に関しまして、一方ならぬご協力、ご支援を賜り、ありがたく厚くお礼申しあげます。この3月をもちまして当該研究所を退任するにあたり、一言ご挨拶申しあげます。

地域経済研究所は、2001年4月、地域が保有する固有の資源を活かしながら、産業活性化と公共政策への時宜に適った提言を行うため、福井県立大学の附置研究機関として誕生しました。同時にそれは、大学本来の役割である研究・教育面での活動に加えて、本学における基本理念の一つでもある「地域と連携した開かれた大学」の実現を目指し、より現実的な地域貢献活動を実践しようとする役割を担っていたことは言うに及びません。こうした中、近年は喫緊の課題でもある人口減少対策や地域産業・企業の課題解決に向けて、さらには県民の暮らし向きに関する研究まで、幅広く多様な調査・研究を実施しているところでございます。また、地域経済研究所は、そうした研究事業と合わせて、フォーラム・シンポジウムなど研究成果を地域企業の皆様、県民の皆様、関連諸団体の皆様に発信するというインターフェイス事業を果たす使命も担っております。直近の3年間はコロナ禍により事業の制約を受けることもありましたが、今後は以前にもまして注力すべき事業と考えております。

いずれにいたしましても、研究所のこれからを考えますと、福井というローカルな地域に根差す研究所だけに、福井にある研究機関でなければできない、福井ならではの研究テーマを掲げて取り組んでいくことも必要と考えます。

最後に、私事ではありますが、皆様には開設以来お世話になりましたこと深く感謝申し上げますとともに、地域経済研究所につきましても、これまで以上のご支援、ご厚情を賜りますこと心よりお願い申し上げ、退任の挨拶にかえさせていただきます。

主な業績

著 書

- ・南保勝著 [2023] 『地域再生の未来像 ―越前からのメッセージ―』 晃洋書房
- ・南保勝著 [2019] 『地域経営分析 ―地域の持続的発展に向けて―』 晃洋書房
- ・南保勝著 [2016] 『福井地域学 ―地方創生に向けて―』 晃洋書房
- ・南保勝著 [2013] 『地方圏の時代』 晃洋書房
- ・南保勝著 [2008] 『地場産業と地域経済』 晃洋書房
- ・坂本光司・南保勝 共編著 [2005] 『地域産業発達史』 同友館
- ・坂本光司・南保勝 分担執筆 [2003] 『超優良企業の経営戦略』 同友館
- ・坂本光司・南保勝・杉山友城 [2003] 『データでみる地域経済入門』 ミネルヴァ書房

- ・その他、共著・分担執筆など15編

論文

- ・南保勝著 [2022] 「コロナ禍以降の地域産業の方向性と企業の経営スタイルに関する一考察 — ニューノーマル時代の産業、企業のあるべき姿を考える」福井県立大学『ふくい地域経済研究』第33号
- ・南保勝著 [2015] 「地域産業政策のあるべき姿を問う」福井県立大学『地域公共政策研究』第24号
- ・南保勝著 [2015] 「福井県における伝統的工芸品産業振興のための一考察 — 近年における産地の新たな動きを通じて—」福井県立大学『ふくい地域経済研究』第25号
- ・南保勝著 [2012] 「福井県の成立と近世、明治期の産業」福井県立大学『ふくい地域経済研究』第20号
- ・南保勝著 [2011] 「企業活動におけるグローバル化の効果と地域企業の方向性」福井県立大学『ふくい地域経済研究』第14号
- ・その他、査読有り論文12編、査読ナシ17編

寄稿

- ・南保勝著 [2022] 「地域企業におけるニューノーマル時代の成長戦略」一般財団法人北海道東北地域経済総合研究所『NETT』No116
- ・南保勝著 [2019] 「地域中小企業の新展開 — 福井モデルから、地域中小企業の未来像を考える—」一般社団法人商工総合研究所『商工金融』2019年11月号
- ・南保勝著 [2013] 「産学官金連携の現状と課題」『月刊金融ジャーナル』日本金融通信社
- ・南保勝著 [2012] 「北陸の視座—地域格差と北陸の産業再生—」社団法人北陸建設弘済会編『北陸の視座』
- ・南保勝著 [2010] 「地域資源と福井の未来」日本政策投資銀行地域政策研究センター『Regional policy』Vol.21
- ・その他、『Consultant』社団法人建設コンサルタント協会、帝国データバンク、北陸AJECなど160編以上

報告書・ディスカッションペーパー

- ・南保勝著 [2020] 「福井県企業の「コロナ禍での事業活動に関する緊急調査結果報告書」」福井県立大学地域経済研究所
- ・南保勝著 [2014] 「福井県生活衛生関係営業の現状と課題—アンケート分析結果を基に—」福井県立大学地域経済研究所
- ・南保勝著 [2012] 「福井県産業界における取引構造の変容と、産業構造の変化に対応する企業間・産業間ネットワーク構築に向けての調査研究報告書」福井県立大学地域経済研究所
- ・南保勝著 [2011] 「県民参加による県立大学地域貢献研究推進事業報告書 福井県の休眠および観光資源の積極的活用による経済的に関する予備研究」福井県立大学地域経済研究所
- ・その他、報告書・ディスカッションペーパーなど67編

受賞

- ・福井県知事より、「第6回福井県科学技術大賞特別賞」受賞（平成23年）
- ・金融庁長官、日本銀行総裁より、「2013年金融知識普及功績者表彰」受賞（平成26年）
- ・福井県立大学学長より、「教員表彰」受賞（平成26年）
- ・厚生労働大臣より、「2016年度厚生労働行政功績者賞」受賞（令和元年）
- ・越前市長より、「令和4年度 市政功労賞」受賞（令和4年）

巻 頭 言

表の風に吹かれろ

福井県立大学地域経済研究所 教授 池下 譲治

私が初めて福井を訪れたのは、今からちょうど40年前（1983年）の春のことである。福井駅を降りて赴任先に向かって歩いていたところ、趣のある福井城址の石垣の上に突然、巨大なビル（県庁）が現れたときには、驚きを通り越してカルチャーショックを受けたことは今でも鮮明に覚えている。さらに、英語の標記がどこにも見当たらないばかりか、佐々木小次郎がつばめ返しをあみだしたという一乗谷に向かったところ、場所を示す道路標識がほとんど見当たらなかった。これでは、外国人はおろか、日本人でも地元の人以外はわからないだろうと思ったものだ。福井はバットナムによるソーシャル・キャピタルの2分類における「結合型（bonding）」（内向きの）社会であったと言える。それでも、福井は当時から日本で最も幸福な県と評されていた。朝日新聞系の雑誌で、幸福に関連する10の指標を基に各10点満点で読者にアンケートを取ったところ、全国の都道府県の中で福井が第1位に選ばれたのだ。山や海が近く、美味しい空気、水、食べ物など人間が豊かな生活を送るうえで欠かせない要素がぎゅっと詰まっていることが理由のようだったが、実際にそうであった。

2年間、県内企業の国際ビジネスを支援したのち、85年から3年間、県に出向する形で、福井県初の海外事務所となるNY事務所に初代所長として赴任した。県産品の輸出拡大に向けた各種調査などの仕事とは別に、特命業務として、ラトガース大学に留学した日下部太郎とグリフィスとの関係が縁となって生まれた両地域の友好関係を県レベルにまで引き上げるべく、福井県とニュージャージー州との姉妹提携の実現に向けて奔走した。

それから約30年後（2017年）に戻ってきた福井は、駅前の恐竜を除けば、当時とほとんど状況が変わっていなかった。

福井には良くも悪くも日本の特徴がよく表れている。国民文化研究の第一人者であるホフステードの6次元モデルによれば、日本が特に際立っている文化的特徴が2つある。第一に、「男性性」の傾向の強さである。日本はアジアで1位、世界でもスロバキアに次いで第2位の「男性性」の傾向が強い国である。そのような社会では多様性を受け入れる素地が乏しいという。もうひとつは、「不確実性を回避」する傾向の強さだ。そのような社会では、決定に時間が掛かる、失敗が許されない、よって、イノベーションが遅れることとなる。

ところで、イノベーションには2つのタイプがある。ひとつは特定の方向に向かって一歩ずつ前進していくタイプの「漸進的イノベーション」。日本企業が得意とするカイゼンが当にそうである。そしてもうひとつは「融合のイノベーション」と呼ばれるもので、これはそれまでなかった異分野のアイデアを融合する方法である。以前は、どちらのタイプも同程度の割合だったが、今では圧倒的に「融合型」が主流となっている。融合型イノベーションを促進するには、多様性や失敗を受け入れる素地があることが不可欠である。2022年世界競争力ランキングで第1位と

なったデンマークは当にそのような国であり、日本とは真逆の文化を有している。

多様性が大事なことは2001年に行われたニスベットの実験からも明らかである。ニスベットらは日本人とアメリカ人の2つのグループに水中の様子を描いたアニメーションを見せた。すると、アメリカ人は手前や中心にある「もの」に重点を置き、日本人は「背景」に着目する傾向が見られたのだ。次に、別の場所の水中の様子を見せたところ、日本人は場所が変わったことには気づかず、それよりも背景が変わったことに意識が向いていた。逆に、アメリカ人は背景が変わったことに気づかない割合が高かった。ニスベットの実験で分かったことは、「人は不完全なものの見方をするが、違う見方をする者同士が協力し合えば、1人のときよりも多くの発見を得られる」ということだ。

私が学生・社会人の留学・海外派遣ならびに留学生や（高度）外国人材の受け入れと定着を促す理由がここにある。40年前と違うのは、途上国などの人材やコミュニティ間の交流を通じて、お互いの地域の社会的課題の解決と自社やコミュニティの活性化を同時に達成するといった、ポーターが提唱するCSV（共有価値の創造）を実践する中小企業が福井にも育ってきていることだ。留学生や人材の相互受け入れやこのような企業者が増えていけば、外向きな「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルが醸成され、多様性や失敗を受け入れる素地がある社会が広がっていくに違いない。

最後に、6年間に亘り、大変お世話になった県立大学ならびに福井県に深く感謝申し上げるとともに、大好きな福井県のさらなる飛躍を心から願いつつ、ドラッカーのこの言葉を贈りたい。
～表の風に吹かれろ～

主な業績

著書

- ・池下譲治著 [2023] 『グローバルビジネスの流儀』（単著）晃洋書房
- ・池下譲治他著 [2006] 『展示会活用マーケティング戦略』（共著）ピーオーピー出版
- ・池下譲治他著 [2001] 『メイドインチャイナの衝撃』（共著）ジェトロ
- ・池下譲治他著 [2000] 『アジアの構造改革はどこまで進んだか』（共著）ジェトロ
- ・池下譲治他著 [1999] 『アジア経済再生』（共著）ジェトロ
- ・池下譲治他著 [1996] 『アジアの財閥と業界地図』（共著）日本実業出版社

主な論文

- ・ New possibilities for non-Japanese human resources: The challenge of Japan's SMEs for reciprocal business with emerging markets, International Journal of Business & Management Studies, Volume 02; Issue no 05: May, 2021
- ・ 池下譲治著 [2021] 「グローバル化の功罪と世界経済秩序の再構築に向けての一考察」『ふくい地域経済研究』（福井県立大学）第33号
- ・ 池下譲治著 [2021] 「新段階に入った米中覇権戦争とコロナ後の世界経済」同第32号
- ・ 池下譲治著 [2020] 「変貌する世界、アジア経済と地域の対応」同第30号
- ・ 池下譲治著 [2018] 「マハティールの夢」同第27号
- ・ 池下譲治著 [2018] 「ソーシャル・キャピタルと持続可能な地域社会に向けての一考察」同第26号

その他多数